

統計の眼

増勢が続く冷凍食品の輸入

冷凍食品は、産地や卸売市場、量販店など流通の各段階における低温物流の整備と家庭用大型冷蔵庫の普及とともに発展してきた。また、調理の簡便化嗜好や外食・中食の普及など食をめぐる環境変化を食材供給の面から支えてきた。平成十一年の国内生産高は、生産数量一五〇万トン、生産金額では七五〇〇億円という水準に達している。生産品目は農水産物の素材冷食と調理冷食に大きく区分され、品目別(数量ベース)では、水産物が六%、農産物一九%、畜産物二%、調理食品五九%、その他四%という割合である。

一方、冷凍農水産物の輸入は、平成十一年で水産物が二二〇万トン、畜産物が一三五万トン、野菜が七四万トン、果実が六万トンで、平成二年に比較してもかなりの増勢基調にある。(表)

冷凍食品の海外生産は、冷凍野菜に端を発しているが、近年は調理冷凍食品の製造にまで及んでいる。冷凍食品の輸入は、商社や水産会社、国内有力冷食メーカー等による海外での合弁事業の展開などによって進展した。特に量販店等の低価格志向を反映し、価格優位性を実現できる海外生産の導入により、開発輸入による市場拡大が進んでいる。

これに伴い、国内生産の空洞化が懸念されている。特に野菜については、馬鈴

薯やスイートポテン、かぼちゃなど一部の品目を除き、国内生産の優位性が失われ、生産者は栽培意欲を失い、国内原料による加工業者は転・廃業を余儀なくされている。農水産加工は、一次製品の安定供給や付加価値の向上を図るとともに、地域に就業の場を確保するなど地域経済の振興に資する重要な産業分野を構成している。

水産物についても、これまで冷蔵施設や加工場、運送手段の高度化や、産地と消費地を結ぶ物流諸施設の整備など流通対策が進められてきた。こうした対策とともに、国内原料を活用した加工業の重要性を認識し、産地の発展と国内原料の需要拡大を図る観点から、加工を含めた新たな施策の充実が求められる。(鴻巣)

冷凍農水産物の輸入実績

	平成2年(A) (千トン)	平成11年(B) (千トン)	増加率 (%)
冷凍水産物	1,565	2,217	42
うちえび	297	225	
冷凍畜産物	917	1,348	47
冷凍野菜	305	743	144
うち馬鈴薯	131	281	
豆類	88	128	
コーン	35	52	
冷凍果実	43	64	45

資料:「冷凍食品年鑑」等による